

## 論文内容の要旨

氏名	丸岡 真紀穂
論文題目	スペイン語味覚形容詞の認知言語学的研究 ―日本語との対照を通して―
要 旨	
<p>本論文は、スペイン語の味覚形容詞の用法と意味拡張の範囲を明らかにし、その意味拡張がどのような比喩に基づいているのかを、日本語との比較を通して明らかにしようとするのが目的である。また、スペイン人と日本人の味覚に関する表現の相違点と類似点も併せて考察している。</p> <p>構成 第1章では、本研究の目的と方法を述べている。</p> <p>第2章では、味覚形容詞についての先行研究を概観し、認知言語学の分野における味覚形容詞や形容詞の意味拡張に関する研究と本研究における課題を提示している</p> <p>第3章では、スペイン語の基本味を表す味覚形容詞dulce, salado, amargo, ácido, agrioについて考察している。味覚形容詞の意味拡張については、これまで共感覚表現を取り上げた研究が多くなされ、低次の感覚から高次の感覚に意味拡張が起きるとする「一方向性仮説」が提示されている。しかし、スペイン語の味覚形容詞のなかには、特に味覚より低次の触覚への意味拡張において“dulce pelaje”（甘い毛並み）のように、明らかにその説に反すると思われる例がみられる。本章では、それぞれの形容詞について用例を考察し、基本義の同定と、意味拡張の範囲の確認を行い、スペイン語の基本味を表す各味覚形容詞について以下の点を明らかにしている。</p> <p>① 甘味を表す形容詞dulceは、五感全てに共感覚表現がみられる。また、agonía（苦悩）やsufrimiento（苦しみ）などのネガティブな感覚を表す名詞とも共起する。これらのいずれの意味拡張においても、「心地よさ」という身体感覚が関わっている。</p> <p>② 鹹味を表すsaladoの意味拡張は、味覚以外の全てにおいて意味拡張していたdulceとは異なり、嗅覚以外への拡張がみられなかった。一方、人物の性質に意味拡張する場合には「面白味がある」というポジティブな性質を表すことを指摘している。</p> <p>③ 苦味を表す形容詞amargoは、触覚以外の全ての感覚について共感覚表現がみられる。いずれもdesengaño（失望）やquejas（嘆き）などのネガティブな感情を表す抽象名詞やalegría（喜び）やfelicidad（幸せ）などのポジティブな感情を表す名詞とも共起する。いずれの意味拡張においても「不快さ」という身体感覚が関わっている。</p> <p>④ 酸味を表す形容詞にはácidoとagriogがあるが、この2つの形容詞の使い分けは曖昧であるが、両語とも触覚以外の感覚に共感的に意味拡張している。さらに、人物を評価する場合には、どちらも「気難しい」或いは「無愛想」であることを表す。このように、両語が共通の拡張義を持つことは、ácidoとagriogの語源がいずれも「鋭い」または「とがった」という視覚表現からの派生であることに起因するとみられる。両語が酸味を表すようになったのは、舌を刺激する酸の味を、鋭いものによる刺激に重ねた表現であると考えられる。</p>	

⑤ 5つの味覚形容詞の全てにおいて共感覚表現への意味拡張がみられたが、「一方向性仮説」への反例が見られたのはdulceのみであった。また、dulceとamargoの意味拡張にはそれぞれ「心地よさ」と「不快さ」という身体感覚が関わっている一方で、saladoやácido, agriogの意味拡張は感覚の同時性や類似性に基づくものであり、身体感覚からは離れた拡張であると推測される。このことから、スペイン語における味覚形容詞の体系において、dulceとamargoは最も基本的な味覚であり、「快」「不快」の対立に基づいて広く意味拡張しているものと考えられる。

第4章では、スペイン語味覚形容詞の統語的特徴と意味の関係について考察している。本研究では、スペイン語の味覚形容詞が、名詞に前置される場合と後置される場合とで、どのような意味の相違を生じるのかを調べるため、特に意味拡張の範囲が広いとみられるdulceが限定用法で用いられている例を調査している。その結果、味覚形容詞が名詞に前置される場合は、発話主体が名詞で表される行為や事物、感覚、感情に対してdulce viaje（甘い旅行→懐かしい旅行）のようにdulceという感覚を主観的に把握していると指摘している。したがって、限定用法においては、前置も後置も可能なスペイン語の味覚形容詞の語順選択の基準として、話者が臨場的・体験的に事態把握をする場合には、名詞に前置されるといふ仮説を提示している。

さらに、dulceの形容詞の統語構造と意味の関係について、認知言語学の意味研究で注目されている「主観性」という観点から考察している。その結果、叙述用法においては内的感覚を表す抽象名詞と共起する場合には、主語後置構文という有標の形式をとることを明らかにしている。

第5章では、スペイン語話者と日本語話者の味覚に対する捉え方の違いを、アンケートの結果からプロトタイプ理論に基づいて考察し、以下の点を明らかにしている。

① 甘味を表すdulceから日本人とスペイン人が連想する食べ物は、菓子類や糖類である。これに対し日本人は、菓子類や砂糖以外に新鮮な野菜にも「甘い」と表現することがある。

② 鹹味を表すsaladoからは、jamón serrano（生ハム）などのスペイン人が慣れ親しんできた伝統的な食べ物が挙げられる。これは日本人が梅干し、塩辛など祖先から受け継いできた伝統的な食品を「塩辛い」と表現するのと同様である。

③ 苦味を表す形容詞amargoが修飾する名詞としては、スペイン人はコーヒーをはじめとする飲み物を多く挙げているが、食べ物についてはalmendras amargas（苦扁桃）のみであった。一方、日本人はゴーヤなど苦味のある食品を好んで食べる傾向がある。

④ 酸味を表す形容詞にはácidoとagriogがある。アンケートの結果から、ácidoは柑橘類、agriogは酢を主に形容する。一方、日本語では柑橘類にも酢にも「酸っぱい」という形容詞が使用される。

さらに、スペイン人へのアンケート調査により、スペイン語では「おいしさ」がどのように表現されているのかを分析し、「おいしさ」を表す形容詞rico, bueno, exquisitoなどが、おいしさの度合いによって段階的に使われているとしている。一方、日本語ではおいしさを表す形容詞には「おいしい」「うまい」などに限られており、簡潔な表現で五感に訴えることのできるオノマトペが多用されることを指摘している。

#### 結論

終章において、スペイン語の味覚形容詞の体系において、dulceとamargoは最も基本的な味覚であり、「快」「不快」の対立に基づいて広く意味拡張していると結論付けている。今後の展望として、同じラテン語から派生したロマンス諸語においてもこの結果が適応できるのかを検証することを課題として挙げている。

## 論文審査の結果の要旨

氏 名	丸岡 真紀穂
論文題目	スペイン語味覚形容詞の認知言語学的研究 ―日本語との対照を通して―

### 要 旨

本論文では、スペイン語の基本味を表す形容詞の用法と意味拡張の範囲を明らかにするとともに、スペイン語と日本語の味覚に関する表現を考察することで、日常言語の意味と文化的背景との関わりについて検討している。

これまでの味覚形容詞に関する認知言語学的研究では、味覚語、特に甘味を表す語の多義構造に関する分析が行われ、また、意味拡張の観点から、その方向性や拡張の動機を明らかにする研究が行われてきた。しかし、これらのほとんどの研究が英語や、英語と他の言語との対照を中心としており、個別の言語についての研究はあまり行われていない。一方、スペイン語の味覚形容詞に関しては、統語論的・意味論的観点からも、認知言語学的観点からも研究の数は少なく、この点で本論文は、その意味構造に関する体系的でより包括的な研究として評価できる。さらに本論文は、スペイン語と日本語との対照を通して味覚表現と文化的背景との関わりについて考察している点で、特筆に値する。

第3章において、スペイン語の基本味を表す味覚形容詞dulce, salado, amargo, ácido, agrioについて詳細に考察し、基本義の同定と意味拡張の範囲の確認を行っている。その結果、スペイン語の基本味を表す各味覚形容詞について次のように結論付けている。

5つの味覚形容詞の全てにおいて共感覚表現への意味拡張がみられたが、「一方向性仮説」への反例が見られたのはdulceのみであったことを指摘している。また、dulceとamargoの意味拡張にはそれぞれ「心地よさ」と「不快さ」という身体感覚が関わっている一方で、saladoやácido, agrioの意味拡張は感覚の同時性や類似性に基づくものであり、身体感覚からは離れた拡張であると結論付けている。

第4章において、次のような仮説が提出されている。

(1) スペイン語の味覚形容詞は、話者が臨場的・体験的に事態把握をする場合には、名詞に前置される。

この仮説によって、次のような、形容詞が名詞に前置された例が説明できる。

(2) dulce paseo (心地よい散歩)

(3) dulce viaje (懐かしい旅行)

このような場合、形容詞の意味は話者の直接体験が投影された意味であると判断される。

同じく、次の例においても、

(4) Quiero un melón dulce. (私は甘いメロンが欲しい。)

(5) Prueba el dulce melón. (その甘いメロンを食べてごらん。)

(4) は非体験的、(5) は体験的な意味であり、(4) ではメロンの種類が述べられているのに対し、(5) では、メロンを食して感じた味が述べられているという。

この仮説は極めて興味深いものであり、この仮説は妥当性をさらに追及する価値がある。例えば、「長時間の散歩」、「安い旅行」におけるように、「長時間の」、「安い(経済的な)」といった客観的な形容詞がついている場合には、前置されないということがわかれば、上の仮説はより実証的になる。また、同じ「甘いメロン」でも、「この地方は甘いメロンが特産だ」といった場合には、前置されないということになるが、はたしてそれは正しいのかも考察する必要がある。

いずれにせよ、上の仮説は、形容詞の前置・後置という文法的な問題と意味の主観性・客観性とがからみあった独創的な仮説として注目される。

第5章において、スペイン語話者と日本語話者の味覚に対する捉え方の違いを、スペイン人へのアンケートを基に、プロトタイプの観点から考察している。その結果、スペイン語話者と日本語話者の基本味覚の表現には、伝統食から味覚形容詞のプロトタイプが生まれ、それぞれの言語が話されている文化的背景に大きく関わっているのではないかという点が示唆している。

さらに、スペイン語のrico, bueno, exquisitoなどの「おいしさ」を表す形容詞はおいしさの度合いによって段階的に使われているのに対し、日本語ではおいしさを表す形容詞は「おいしい」「うまい」などに限られるが、簡潔な表現で五感に訴えることのできるオノマトペが多用されるという興味深い事実が指摘されている。

### 審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教 授	田尻 陽一
副 査	教 授	澤田 治美
副 査	教 授	山梨 正明

### 最終審査の結果の要旨

氏 名	丸岡 真紀穂
試 験 科 目	
判 定	合 格
要 旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した（2014年2月9日）。</p> <p>申請者は、「意味拡張に関する一方向仮説」、「共感覚」、「主観的事態把握」、「意味の主観性・客観性」、「主体性」などの概念を深く理解し、認知意味論をはじめとする現代の語彙意味論の枠組みを十分に身につけている。また、味覚形容詞に関連する国内、国外の文献を広く渉猟し、自らの分析に取り入れて、研究の客観的妥当性を高めている。</p> <p>本論文で行われたスペイン語の味覚形容詞と日本語の味覚形容詞の比較・対照研究は辞書や文法書に新しい知見を提供する。同時に、スペイン語と日本語の対照という観点からスペイン語教育に対して重要な貢献をなし得る。本論文における考察を深めていくなれば、味覚に関する比較言語文化論にまで発展する可能性を秘めている。今後は、スペイン語の味覚形容詞の統語的側面にも分析を広げ、仮説の反証可能性を高めて、味覚における認知の主体と客体との関係を解明することを期待したい。</p> <p>口述試験において、論文内容の質問については、明確に答えることができたと判断する。申請者の外国語の試験については、スペイン語および英語の要約から推察し、あわせて参考文献に挙げられた諸文献の扱いから判断して、外国語の学力に関する試験を免除した。</p> <p>審査委員会は、全員一致で博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

#### 審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教 授	田尻 陽一
副 査	教 授	澤田 治美
副 査	教 授	山梨 正明